

彦根城概要

彦根城は、17世紀の初頭（1604年）に新たに藩主に任命された井伊家によって建造された。城は将軍徳川家康（1534-1616）が打ち立てたばかりの幕府を脅かす反対勢力の大名たちが連合するのを防ぐために、家康の命令で建設された。彦根は商業的にも戦略的にも重要な場所で、琵琶湖に面する豊かな農業地帯であり、また首都江戸と西日本を結ぶ2街道の1つ中山道の主要な（宿場）町であった。琵琶湖は京都に近接しており、この地域の交通の要所で、西国大名が幕府を攻撃するために団結した場合、中山道が首都江戸への主要なルートとなり得た。そのため城は、戦闘で功績があった井伊直政（1561～1602）に与えられた。直政はその命を受けたが、すぐに亡くなった。息子の直継（1590-1662）がその事業を引き継ぎ、1604年から1607年の間に城郭の大部分を建設した。その後、異母弟の井伊直孝（1590～1659）が病弱な直継に代わって藩主となり、1622年に城と表御殿を完成させた。

彦根城は日本で最も保存状態の良い城の一つであり、多くの建物が重要文化財に指定されている。城の特徴の多くは、中世日本（12世紀～16世紀）の山城における典型的なものであるが、日本の多くの城が経験したような、17世紀になって、要塞から行政の中心へと城の役目が移行したことを示す特徴も残している。たとえば、本丸を囲む石垣は、戦国時代（1467-1568）の山城を強く偲ばせる。しかし、この城の表御殿には、会議や行政に使用される部屋が備わっているが、回遊式庭園や茶室などは見られない。要塞としての彦根城には数層の防備施設が備わっていた。その本丸は、いくつもの廓に囲まれた彦根山の平らな山頂に建てられた。城の敷地はかつて3つの同心円状の堀に囲まれていたが、その内側と中間の堀は今も残っている。彦根城は防御的および戦略的に重要な場所にあったにもかかわらず、一度も戦場とはならなかった。1868年の幕府の崩壊後、1873年に明治天皇（1852～1912年）は、徳川幕府の名残である古城の廃城令を公布した。彦根城も解体の予定であったが、天皇がたまたま当地をご訪問されたときに城は救われた。当時の議員であった大隈重信（1838-1922）は、その本丸の美しさに感動し、天皇に後世のためにそれを残してほしいと懇願した。天皇が同意したおかげで、彦根城は解体を免れたのである。